

序論

読者の「なぜヴォイニッチ手稿に関するさらなる論文が必要なのか？」という疑問はもっともだと思う。多くのことはすでに語られている。この最も研究され、最も興味深く、そして最もミステリアスな手稿は多くの研究者の才能を無駄に使い果たしてきた。おそらくほんの短い説明が、私がこの論文を書くことになった動機と舞台準備を読者へ提供するのに有効であろう。

比較的最近になってヴォイニッチ手稿の研究に加わった人たちと同じく、私は知らずに先達たちの足取りを辿り、情報を再発見し、彼らの実験を繰り返し、彼らが興奮したように私の興奮も予期されたものであった。私の努力全てを後悔していると言いたくはないのだけれども、その後でしばしばこれら全てのことはすでに試され失敗したものであった事を知るのであった。事実私は疑うこともなしに、このヴォイニッチ手稿の問題を 1975 年に Tiltman 准将の講演で紹介されてから、次の年は暇な時間を多世紀に渡る知的・精神的旅行そして美術、歴史、哲学、言語学研究に全て費やしたものだ。私は調査の時間を完全に楽しみ、どんなことも諦めはしなかった。

私の知る限り、他人の論文の中で見ることのできる Wilfrid M. Voynich が 1912 年にこの手稿を発見してから 55 年の間に蓄積されてきた全ての試み、アイデア、背景となる情報、そして分析的研究で何一つ完璧なものではなかったというのが事実である。ほとんどの論文は部分的な理論を発展、もしくは反論するものであり、他人の努力を少し眺めただけで、主にそれらを退けるものであった。いくつかの提案は問題のいくつかの面をとらえた良いものがあり、注目すべきは Voynich (1921), Newbold (1928), Tiltman (1968), Krischer (1969) のそれらである。しかし多くの重要な情報は出版されていないノートや論文で見ることができるのみであり、ほとんどの研究者は入手できない。もし私が調査し手に入れた全ての情報をまとめ、きちんと整理して見せることができるのなら、それはどんなに有用なものになるだろうと感じていた。それは確かな基礎として、他の研究者がこの文章を解読しようとしたり、問題をもっと学ぼうとしたときに行うであろう仕事を結果として提供できればよいと思う。

この論文は大きく分けて 4 つからなる。初めはいわば「所定の事実」であり問題の基本となる事実を提供する。二番目は初期に行われた解読の方法とそれに関連する現象的なもの、つまり絵や文章といった手稿そのものの情報をできる限りカバーする。三番目は主要な解読の主張と他のたくさんの研究者によって行われた分析を調査する。四番目は役に立ちそうな副次的そして背景となるトピックの概略を大まかに紹介する。ヴォイニッチ手稿に関するものや、様々な関連するトピックの参考文献も含まれる。

私は惜しめない援助を与えてくれた John H. Tiltman に謝辞を表したい。彼の激励なしにはこの論文は完成することはなかった。またこの書を校閲し、たくさんの助けとなる批判、助言をしてくれた Stuart Buck, Edwin S. Spiegelthal そして Stuart MacClintock にも感謝をしたい。